



John Tyler/ジョン・タイラー

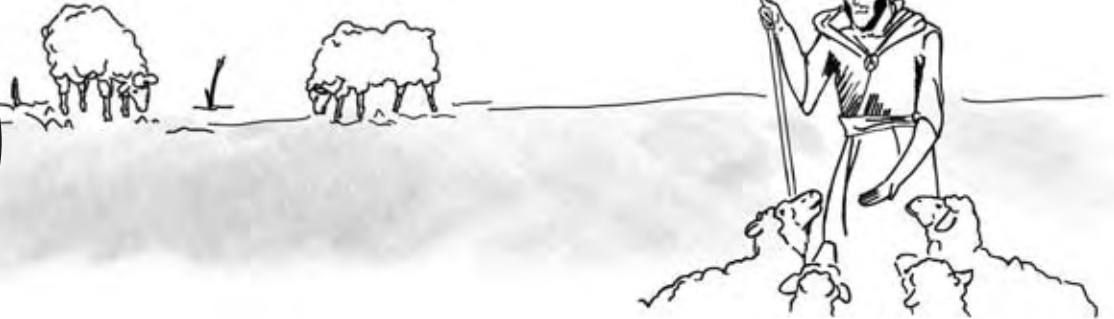
タイラー氏は、キリスト教科学実践士、  
また教師であり、米国、  
ペンシルベニア州、  
ピッツバーグ在住。

## 神を、生命として発見する

# 人生 — あなたの霊的自叙伝

## Life — Your spiritual autobiography

われわれは神のうちに  
生き、動き、存在して  
いる。  
(使徒行伝 17:28)



セ・ラ・ヴィ、直訳して「それが、人生さ」という言葉は、しばしば「しかたがない」という意味で使われますが、このような言い回しは、ほとんどどの言語にもみられ、運任せ、時には、あきらめの境地を表わすのに使われています。このような見方は、運が、私たちの人生を非常に大きく左右するという前提に深く根ざしています。しかし、人生とは、本当に、何なのでしょう？ かなり前のことですが、映画化された本の題名 *Whose Life Is It Anyway?* 「この生命、誰のもの？」というのがありました。この題が言わんとしているのは、自分の人生については、自分に責任があり、人生は自分のものだ、と言うことです。しかし、本当にそうなのでしょう？

人の人生を決めるのは、本来「天性によるのか、それとも養育によるのか？」つまり、親から受け継いだ遺伝的性質によるのか、それとも、私たちの受ける教育、または環境によるものなのか、という論議が盛んに行なわれています。もし私たちが、人の人生の原因を「説明」しようとする生理学的、心理学的な理論を、半分でも受け入れてしまうと、私たちは、あらゆる意味で、未然に決められ

てしまう、運命づけられてしまう、また、条件づけられてしまうことになるでしょう。

そこで、もっと深く探ってみましょう。辞書の定義によると、「生命」は、有機体で、自分で動き、成長できるもの、とされています。私が、聖書のなかで最も感動した発見は、モーセが、**神に**、ご**自分の**身分を示してくださいと言ったときの、**神の**答です。モーセは、**神が自分の**名前、つまり身分は、「**わたしは在る**」である、と言うのを聞きました。ここで、**神が**、あなたに、**彼は唯一の「わたしは在る」**であると告げ、そして、それを聞いてから、この言葉を使うときは、その言葉は**神のみに**言及するというに、突然、気づいたとしてみてください。モーセにとって、これは人生の大きな転換点となりました。彼は、**神が**、**自分は**存在するものすべての特別の原因であり、唯一の現存である、と言うのを聞いたのです。このとき以来、モーセは、自分の身分について、根本的に違う見方をするようになりました。彼は、自分の存在のすべて、つまり彼の「**わたしは在る**」は、**神から**来たものだということを学び始めました。このとき、この新しい身分により、モー

セは、彼の仲間であるイスラエルの民の指導者となったのです。

これは、画期的な考えです。3千年以上前のモーセにとっても、そして今日も、画期的な考えです。このような人生の見方には、私たちを変身させる、文字通り根本的に、完全に、変身させる力があります。それには、何が関わっているのでしょうか？ 意識が関わっているのです。私たちが、自分をどのように考えるか、特に自分の起源をどのように考えるかです。もし、科学者の多くが賛成しているように、生命が有機体でできた物質の塊以上のものであるとしたら、それは、どこからか、来るはずでしょう。これこそが、**神の**答が意味するところだったので：モーセの唯一の源は、**神**であったゆえ、唯一の、偉大な「**わたしは在る**」であったゆえ、モーセは自分の起源は純粋に霊的であると理解したはずで

モーセは、パロの宮殿で王子として育てられましたが、ある深刻な事態のために、高位を去り、素朴な羊飼いになりました(出エジプト 2:11-25)。この事態を経て、モーセは、どんな困難な状況にあっても、**神**に従う

という、謙虚さを学びました。それが、**神**の名は「わたしは在る」であるという、**神**の啓示の驚くべき意味を、彼に理解させたのです。

この新しい理解は、素朴な羊飼いであったモーセの人生を一変させました。そして、彼は国の指導者となるのですが、それは、**神**の権威に基づくものであり、人間的支配によって得た地位ではありませんでした。しかも、モーセはこの新しい任務を計画して得たのではなく、求めたのでもありませんでした。そうではなく、彼にとって最も重要なことは、私たちにとってもそうあるべきですが、**神**の導きに耳を傾けることを学んだことでした。彼は、**神**と離れた人生はないことを、理解しました。**神**の声を聞いて、彼の人生の目的は、イスラエルの民を奴隷の地から「約束の地」に導くことであると悟りました。これは旧約聖書に記録されている歴史の中でも、最も偉大な功績です。

皮肉なことに、これほどの功績を残した人でありながら、モーセは、結局、最高に謙虚であった人として知られています。「権力」と「謙虚さ」はめったに共存しないものと思われている今日、モーセは、なんと貴重な模範でしょうか。モーセは、**神**が彼に人生、生命を、単に「与えた」のではないことを理解していました。**神**が「彼」を生きていることを学び知ったのです。これによって、彼は、すべての焦点を、彼自身にではなく、**神**に置きました。この見方は、メリー・ベーカー・エディが著書『科学と健康』のなかで、**神**を、次のように定義しているのと符合します:「偉大な**わたしは在る**; “すべて知るもの”、“すべて見るもの”、“すべて行動するもの”、“すべて賢明であるもの”、“すべて愛するもの”そして永遠なるもの; **原理**; **心**; **魂**; **霊**; **生命**; **真理**; **愛**; すべての実質; 知性” (p. 587)。この**神**の定義には、**神**の同意語の中に「**生命**」が含まれ、**神**が私たち一人一人の真の生命、人生であることを、更に顕著に示していることが分かります。

もし、私たちが、モーセの模範に従って、これまでの物質的な身分、その個性、欠点、遺伝的枠組み、過去の事故や境遇などに、焦

点を当てることから転じて、私たちの人生は**神**のみに依存することを、理解し始めたら、どんなことが起こるでしょうか。私たちは、一人一人、ある種の復活、つまり新しい人生をもたられることを、私は確信しています。

私たちは、自分の身分に、このような展望を持つようになると、つまり**神**が「私たち」を生きていると思いはじめると、モーセがそうしたように、私たちも自分の人生の「あらゆる面」を見直し始めるのです。例えば、誰かが私たちの伝記を書くとしたら、私たちの先祖から始めて、私たちの家庭生活、学歴、専門分野での功績などから、書いてゆくでしょう。しかし、私たちが本当にしなければならぬのは、自分の「霊的」な自叙伝を書くことです。そしてそれは、私たちが、自分の意識の中ですることです。

私たちは、自分たちが真に相続しているものについての考えを調整することから始めます。私たちは、**神**が自分たちの真の唯一の先祖、つまり唯一の**母**であり、**父**であることを理解します。それから、**神**に統治されている環境が、私たちが「育った」世界であり、その中で発展し、成長してきたのであることを理解します。そして、最後に私たちは、自分たちが受け継いだ特質や才能のすべては、同じ源泉、つまり**神**から、直接にきているということを認識します。私たちがしばしば、「私たちの」強さ、美しさ、柔軟性、知恵などと呼んでいるものは、実は、**神**が表現されているものなのです。私たちに、別々の個人的な人生があるという考えを、**神**が私たちが生きている、という意識に置き換えると、新たな活力、創造力、インスピレーションを発見するでしょう。

それでは、死について、どのように考えたらよいのでしょうか？ 死は、生命にとって、光にとつての闇のようなものです。死は、生命を終わらせることはできず、生命に触れることさえできません。むしろ、その正反対であって、生命が、現わされているところに、死が存在することは不可能です。もちろん、この概念は、世間が生命について考えるものとは、相反するものです。それは、世間一般

は、生命を、死という枠組みの中で見るからです。しかしながら、私たちが、死というもの、生命には限りがあり、段々消えていき、最後には終わるという信念であると認めてしまうと、喜びにも限りがあり、体力も弱っていくものだという考えを、受け入れてしまうのです。何であれ限界があることを受け入れると、死が、生命にとって、当然のものであるという不条理を、受け入れてしまうことになるのです。それが、世間が、死に、これほど心を引かれる理由がかもしれません。研究者たちは常に、どうすれば死を延期できるかについて、探求しています。哲学者と神学者らは、常に次のような疑問を抱いています:「その先に、何かあるのだろうか?」「死は、何を意味するのか?」これらの問への答えは、仮説の域を出ることがなく、常に不完全です。

不滅の**生命**、「偉大なる**わたしは在る**」(私たちの唯一の**生命**)は、死を含まないので、私たちが**生命**についてもっと理解するために、もっと時間と努力を有効に使うことができるのです。**生命**についてもっと知るために、**神**に考えを向けることは、その行為自体、非常に急進的なことです。つまり、DNA (遺伝子) など、私たちの真の身分、私たちの将来、私たちの歴史、私たちの人生そのものを、未然に決めてしまうとされているこれらもろもろの要因は、私たちの真の本体を決める要因ではないということです。霊的視点に立つと、どんなに些細なことでも、**神**以外のものに、私たちの人生を左右する力があると認めることは、理に合わないのです。これほど、私たちが解放してくれるものはないでしょう! これ以上、遺伝子のために、縛られていることはないのです。これ以上、しつけや、教育、年齢、どんな生理学にも、縛られていることはないのです。

しかし、どうしたらそのような高い視点を持つことができるのでしょうか。モーセは、自分がしていた日常の仕事に胸にやり、謙虚な心で、彼の霊的感覚に耳を傾けました。これが、彼に、**神**が自分の生命であることを学ぶ旅路につかされたのです。私たちも、また、同様のことを、知的に、霊的に、日々の

生活の中で、行なうことができます、そして、またすべきなのです。私たちは、聖書や『**科学と健康**』などを勉強して、**神**の理解を深めてゆきます。その結果、私たちの霊的感覚が研ぎすまされ、**神**の現存が感じられるようになります。そして、この2段構えの理解を、日々の生活の中で、一瞬一瞬、行動に移してゆくのです。

しばしば、この最後の仕事、日々実践することが、最も厳しいことのように思われます。しかし、イエスは私たちに明解な指示を与えています。永遠の生命を受けるにはどうしたらよいのかと聞かれたとき、イエスは、**神**を、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、愛すように、そして、「自分を愛す」ようにあなたの兄弟、姉妹、つまり、「あなたの隣り人」を愛すように、と教えました(ルカ 10:25-27参照)。言葉で言うのは簡単ですが、**神**が私たちを生きていることを学ぶために、これらの言葉を実際に日々の生活に生かすことは、何より難しい挑戦となります。このもっと愛せよ、という要求は、今、「この瞬間」に、もっと愛し始めることによって、可能となります。すると、私たちは、自分を肉体を持つ存在という姿で見ることから、自分は、神性の**生命**、限界のない**生命**、の表現であり、自分の永遠の源泉と共存していることを認めることに、変ってゆきます。これを知り、理解することによって、私たちは**生命**の現れである自分を、愛すことができるようになります。自分自身をそのように見るようになると、周りにいる人たちをも、自然に包めるようになり、すべての人が、**生命**の特別の、不滅の表現であると見るようになるのです。すると、私たち自身を愛すように、彼らをも愛すことができるようになります。

このような見方は、世間一般が健康を維持することについて言っていることとは、全く対象的です。しかし、今日の社会においても、イエスが示したような、人の純粋な霊的本性についての洞察を示唆するような、意見を聞くことがあります。著名な外科医のBernie Siegal(バーニ・シーガル)氏は、ガ

ン患者は、もっと愛すことを学ぶことによって良い結果を得ることができることを、長年にわたって観察し、記録してきました。シーガル氏は、著書 *Peace, Love and Healing* のなかで、「人類にとって最大の病は、愛の欠乏である」(Harper & Row, 2007) と書いています。インドの医師、Deepak Chopra(ディーパック・チョプラ)氏には、霊性に関する多くの著作がありますが、愛すことによって、年齢を克服することができる、と言っています。ただし、彼はこの愛は、「単なる感傷や、感情ではない」(Interview with Veronica Hay, www.intouchmag.com, May 18, 2007) と説明しています。十分に生きることは、深く、無私の心で、無条件に愛すことです。メリー・ベーカー・エディの詩に、**神**の愛について次のような言葉があります:「**あなたの神性の愛に養われて、私たちは生きる、愛のみが生命なのだから**」("Love," *Poems*, pp. 6-7)。

そこで、次のような疑問が起こるかもしれません。**神**が私たちの人生であると考え、私たちは愛すことによって生きることを知るのには、確かに、非常に魅力的な考えです。しかし、それは、私たちの身体が必要とするものを、無視するということなのでしょう? そうであるならば、それは非常に極端な考え方ではありませんか? その答は、身体を全く「無視しているのではない」、というものです。私たちは、栄養をとり、服をまとい、身を守ります。そして実は、身体が生命の源であると考えないようにすると、以前より楽に身体を管理できるようになるのです。その上、もっと実際に、しかも賢明に自己管理できるようになると同時に、生命、人生についての新しい考え方を、探求できるようになるのです。そうしていると、靈感が湧き、私たちの生活を少しずつ変化させてゆきます。しかし、もっと大切なことは、私たちの考え方がすぐに変わってくるはずだということです。**神**が私たちの本当の生命である、という事実を信じると、過去においても、将来においても、私たちは、一瞬でも**神**から離れることはない、ということが理解できるようになるのです。

親子の関係は、私たちと**神**との関係を示す力強い比喻です。それは、私たちは、自分の真の**親**に完全に依存していること、そして、私たちの**父母**の愛が、子(私たち)の必要をすべて満たしていることを例証しています。私たちと**神**との関係は、正にこのような関係であり、しかもより親密なものです。**神**が私たちを生きていること、また**神**が私たちの思考であり、私たちの行動であり、私たちが愛すことであることを、強く感じられるようになります。

このように思考を変えるということは、難しい要求かもしれません。確かに、それは、多くの修練を必要とします。しかし、私たちは誰でも、死という意識と縁を切ることができるのです。つまり、何であれ、終わりが来るという恐れから解放されるのです。私たちの幸福に、友情に、また異常気象による私たちの健康な地球に、終わりが来るという恐れから、解放されるのです。メリー・ベーカー・エディは、「**生命**とは何か?」という問に対して、端的に答えて、**生命**を、次のように考えるように勧めています:「時間ではなく、永遠が、**生命**という考えを表わし、そして時間は、永遠の一部ではない」。そして、次の驚くべき言明をしています:「一方を認めるに比例して、他方は消えてしまう」(『**科学と健康**』、p. 468)。

使徒パウロは、私たちと**神**との関係を、次のような美しい、素朴な言葉で表しています:「われわれは**神**のうちに生き、動き、存在している」(使徒行伝 17:28)。私は、**霊**のうちに生きるという、私たちの「存在」を、次の3つの概念に集約できていると思っています。つまり、愛、自由、そして謙虚さです。私たちは、**神**を、**生命**そのものを、そして、**生命**の創造である人を、こよなく愛しています。私たちは、不滅の人として、時間に束縛されずに生き、永遠のうちに生き、そして、**神**が唯一の「**わたしは在る**」であることを認めるのです。これこそ、セ・サ・ラ・ヴィ! 「これこそが、人生なのです!」 ✨